

唐獅子牡丹と日本人の行動経済学

唐獅子牡丹

水城一狼、矢野亮 作詞
水城一狼 作曲

義理と人情を 秤にかけりゃ
義理が重たい 男の世界
幼なじみの 観音様にゃ
俺の心は お見通し
背中で吠えてる 唐獅子牡丹

親の意見を 承知ですねて
曲りくねった 六区の風よ
つもり重ねた 不幸のかずを
何と詫びよか おふくろに
背中で泣いてる 唐獅子牡丹

おぼろ月でも 隅田の水に
昔ながらの 濁らぬ光り
やがて夜明けの 来るそれまでは
意地でささえる 夢ひとつ
背中で呼んでる 唐獅子牡丹

KY 首相と恥の文化

安倍前首相がKY、空気が読めないと盛んに言われたことは記憶に新しい。「空気」とは学問的定義があるわけではないだろうが、もともとは日本人の集団に流されやすい傾向を批判した言葉である。ところが安倍前首相の場合、全体的な雰囲気反して独り善がりの方向に走る傾向を非難されたわけで、「空気を読む」ことがむしろ良いこととされているのだ。

「空気」はもともと評論家の故山本七平の著作『空気の研究』より盛んになったと思われるが、同等の日本人の傾向を批判する論述は多い。明治以降にもさまざまな著作があったものだと思うが、それを集大成したのがルース・ベネディ

クトの『菊と刀』である。

ベネディクトのこの著作は太平洋戦争の最中に米国が来たるべき日本統治の参考とするため、文化人類学者のベネディクトに委託したものだ。戦争中であるため、ベネディクトは来日せず、文献のみによって書き上げたため、戦前までのいわゆる日本人論のまとめとなっているように思われる。

さてベネディクトが日本人の特性として指摘したのは

- 恥の文化であり
- 集団主義であった。

「恥」とはまわりの他人に対して恥ずかしい思いをすることであり、神に対して絶対的な「罪」を感じることに異なり、相対的な概念であるとされた。

つまりまわりの人々に非難されなければ(空気を読めれば)、何をやっても良いという側面につながると日本人の特性が非難されたわけである。

果たして日本人の規範意識が相対的なものであるかどうかは、これまでも議論的になってきたが、筆者の考えるところ、日本人が周りの目を気にし、同調する傾向は強いものであると思われる。

義理と人情と規範意識

さて周りの目(空気)を超えた普遍的な規範意識は日本の伝統になかったのか、という問題が、義理人情の問題につながる。

人情はともかく、「義理」と言えばヤクザ映画とバレンタインのチョコレートにしか今では残っていない。そこで順に考えてみよう。

現在でもVシネマの大半がヤクザものであるのだが、1950年代から60年代にかけてヤクザ映画は興隆を極めた。その中での大スターは鶴田浩二であり、藤純子、菅原文太などが、何と言ってもヤクザ映画の大スターは高倉健であろう。

「唐獅子牡丹」は高倉健主演の『昭和残侠伝』シリーズの主題歌である。ここで問題なのは

義理と人情を秤にかけりゃ、
という歌詞である。圧倒的に不利な状況でも、義理を果たすため、駆けつけてゆく高倉健のバックにこの音楽が流れるわけだ。

義理とは何であるか、何を意味しているのか、そして対句となっている義理と人情をどのようにとらえるか、については次の3つの立場があるように思われる。(義理と人情を扱った包括的な書物として、源了圓『義理と人情』中公新書、佐藤忠男『長谷川伸論』岩波現代文庫などを参照。)

•[1] まず歌詞のように、義理と人情を対立するものと見る、つまり義理を公的な規範ととらえ、人情を私的な感情と考える立場である。ところが、

•[2] 「義理人情の男」というように義理と人情を同一のものとする考え方もある。言わば古いしがらみや人間関係を大切にする立場である。

ヤクザ映画など、エンターテインメントの多くは

• 義理と人情のいたばさみを主題とすることが多い。「いたばさみ」は脚本上の重要なテクニックであり、それがないとドラマは盛り上がらない。たしかに忠臣蔵の赤穂浪士などは

• 公的(天下の秩序のため)には処罰すべきだが、

• 私的には同情するなどの枠組みを持つようなドラマが多いことが気付く。歌舞伎のテーマでいえば忠孝ということになるが、

• 身分の高いものへの忠義
• 家族への孝行
のいたばさみが大きなドラマを生むのである。

このように考えると、

•[3] 「義理」と「人情」は本来、合一すべきものであるが、時に相反する場合があるという立場が穏当であるように思われる。

つまり親への孝行が公的には処罰される事態は本来は望ましくない例外的な事態のはずなのである。ところが忠義も孝行も義理も人情も満たされていれば、それはドラマにならない。そこで例外的な事態が義理と人情の板挟みとして、ドラマ化されているのである。

義理チョコとエージェンシー問題

「世のため人のため」という言葉があるが、「世のため」が義理ならば、(回りの)人のために「人情」であり、本来、行動は世のためにもなり、人のためにもなるのが望ましい、とすることを述べてきた。

このような両義性を満たすことが社会のルールとして望ましいのだが、それなら法律や規則として厳密に定義されるのが望ましいかといえばそうではない。

「義理」という言葉は現在では若干、インフォーマルな行動のニュアンスが含まれているのである。バレンタインデーの義理チョコは義理という言葉が残存している例であり、義理チョコを無理矢理、経済学的に解釈すれば、女性の同僚や部下からの男性上司や同僚へのインフォーマル評価の契機を与える機会であるのが適当と思われる。

360度評価と言って、上司から、部下から、取引先からとあらゆる側面からの人事評価を行う手法があるが、その一環としてとらえることもできない。

しかし義理チョコの数に応じて人事評価をすればよい、と考える人はもちろんおらず、義理チョコは規則化や、制度化されないところにその妙味があると言えよう。

このような「空気」を表す微妙な評価が言わば文化というものであって、明示的な数字と規則だけでは社会は回ってゆかないと筆者は考えるのだが、一方で論理を無視した「空気」だけで世の中が動いていく危険性も日本社会には大いに存在すると言えよう。大げさのようだが、ここが日本社会を考えるポイントになるように思われる。